

植物防疫基礎講座：ハダニ類の見分け方(5)

ナミハダニ亜科のハダニ(3)

鳥取大学(名誉教授) 江原昭三
茨城大学農学部 江原昭三
後藤哲雄

2-5 アケハダニ属(Eotetranychus)

後体部の背面正中域は横走る条線をもつ。2対の側肛毛をもつ。爪間体は裂けて3対の腹方に向かう毛になっている。第I脚跗節にある2組の二重毛は末梢部に位置し、隣接している。本属の日本産21種は6種群に分かれている。アケハダニ属の“アケ”とは、Eotetranychusの“Eo”(ギリシャ語で「夜明け」,「あかつき」を意味する eos から)に基づく。

種群と種への検索表

- 1 第II脚脛節は6本の通常毛をもつ ... clitus 種群 ... 6
- 第II脚脛節は7~8本の通常毛をもつ ... 2
2 第II脚脛節は7本の通常毛をもつ ... uchidai 種群 ... 7
- 第II脚脛節は8本の通常毛をもつ ... 3
3 雌の生殖口蓋(図-4)のすぐ前の皮膚条線は横走 ... willamettei 種群 ... 8
- 雌の生殖口蓋のすぐ前の皮膚条線は横走しない ... 4
4 雌の生殖口蓋のすぐ前の皮膚条線は縦走 ... 5
- 雌の生殖口蓋のすぐ前の皮膚条線は不規則 ... pallidus 種群 ... 14
5 雌の生殖口蓋の条線は横走 ... hicoriae 種群 ... 16
- 雌の生殖口蓋の条線は前部では縦走し、後部では横走する ... sexmaculatus 種群 ... 20
6 ... シイノキアケハダニ(31)
7 雌の周気管の末端部はほとんど直線状(図-5) ... ウチダアケハダニ(32)
- 雌の周気管の末端部はU字形に曲がる ... アンズアケハダニ(33)
8 雄の出糸突起は高さが幅と同長かわずかに長い ... 9
- 雄の出糸突起は高さが幅の少なくとも2.5倍 ... 11
9 挿入器は後部でゆるやかに曲がり、末端に拡張部

- を欠く ... 10
- 挿入器は後部でゆるやかに曲がり、末端に拡張部をもつ(図-46) ... ミチノクアケハダニ(34)
10 挿入器の末端部はほとんど直線状(図-47) ... ミズキアケハダニ(35)
- 挿入器の末端部はS字状(図-48) ... ルイスアケハダニ(36)
11 挿入器は途中に起伏がある ... 12
- 挿入器はほとんど直線状(図-49) ... ハンノキアケハダニ(37)
12 雌の周気管の末端部はU字形に曲がる ... 13
- 雌の周気管の末端部はL字形に曲がる(図-53~55) ... クリアケハダニ(38)
13 挿入器は軽く起伏する(図-50) ... シナノキアケハダニ(39)
- 挿入器は強く起伏する(図-52) ... クルミアケハダニ(40)
14 雌の背中後体毛はすぐ後ろの毛の起点をはるかに越える ... 15
- 雌の背中後体毛はすぐ後ろの毛の起点にかるうじて届くくらいである ... スギナミハダニ(41)
15 挿入器の軸部の腹縁は直線に近い ... エノキアケハダニ(42)
- 挿入器の軸部の腹縁は凸状 ... ムクノキアケハダニ(43)

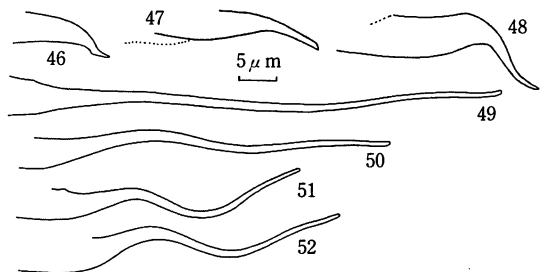


図-46~52 挿入器

46: ミチノクアケハダニ, 47: ミズキアケハダニ, 48: ルイスアケハダニ, 49: ハンノキアケハダニ, 50: シナノキアケハダニ, 51: クリアケハダニ, 52: クルミアケハダニ (EHARA, 1999).

- 16 雌の出糸突起は高さが幅の約2倍……………17
 — 雌の出糸突起は高さが幅の約1.5倍……………
 ……………スミスアケハダニ(44)
 17 挿入器は後部でS字状に曲がる……………18
 — 挿入器は後部でほぼ直角に下方に曲がる……………
 ……………ヒメカエデアケハダニ(45)
 18 挿入器の軸部の背縁には起伏があり、腹縁は強い
 凸状(挿入器の末端部は膝から下あたりの人の足
 状)……………ニセカツラアケハダニ(46)
 — 挿入器の軸部の背縁はほぼ直線状、腹縁はゆるや
 かに凸状……………19
 19 爪間体の正中背部には顕著な爪状突起がある……
 ……………イヌシデアケハダニ(47)
 — 爪間体には爪状突起がない……………
 ……………コナラアケハダニ(48)
 20 雌の出糸突起は高さが幅の少なくとも2倍……21
 — 雌の出糸突起は高さが幅とほぼ同長……………
 ……………オオカエデアケハダニ(49)
 21 雄の出糸突起は円錐形、挿入器は後部で腹方に曲
 がり、ほぼ真っすぐに下降する……………
 ……………コウノアケハダニ(50)
 — 雄の出糸突起は円筒形(高さが幅の約2倍)、挿
 入器は後部で腹方に曲がり、細くなりながら真っ
 すぐに下降し、末端で軽く反り返る……………
 ……………ミヤケアケハダニ(51)

(31) シイノキアケハダニ *Eotetranychus shii* EHARA
 雌：淡黄色で、後体部の側縁部の黒斑はしばしば各側
 3個に見える。背腹に扁平。胴背毛の大部分は隣り合う
 毛の起点に届かない。周気管はU字形またはそれに近
 い形に曲がる。体長480 μ m。雄：同色。挿入器は軸部
 が三角形に近く、末端部が顕著な^{など}鉤状。体長360 μ m。
 シイ類の葉裏に寄生する。主脈や凹部を利用してシェル
 ター状の巣網を張り、その下に生息。網の上には黒色や
 金色の糞を出す。柄のない白色の卵は、巢内でさらにベ
 ール状の網に包まれる。被害は白色の脱色痕として現れ
 るが、葉の寿命との関係から、当年の食害痕とは限らな
 い。休眠性はないと考えられる。

(32) ウチダアケハダニ *Eotetranychus uchidai*
 EHARA
 雌：淡黄緑色で側縁部に黒斑をもつ。周気管の末端部
 はほぼ直線状で、末端がやや太い(図-5)。胴背毛は隣
 り合う毛の起点を越える。体長420 μ m。雄：同色。挿入
 器は後方で鋭く下降し、ほぼ直線状で終わる端末の背方
 に三角形の突起をもつことが顕著な特徴。体長280 μ m。
 ハルニレヤケヤキの葉裏に寄生する。雌成虫で休眠し、

休眠雌は鮮黄色に変わる。生態は不詳。

(33) アンズアケハダニ *Eotetranychus boreus* EHARA
 雌：淡黄緑色で側縁に黒斑がある。周気管の末端部が
 U字形に曲がる。体長350~460 μ m。雄：挿入器は後
 方でわずかに腹方に曲がり、以後はわずかず細くなっ
 てそのまま細長い末端部を形づくる。出糸突起は円錐形
 であるが、形態の変異が大きい。体長320 μ m。アンズ、
 スモモ、ウメに寄生する。生態は不詳。

(34) ミチノクアケハダニ *Eotetranychus geniculatus*
 EHARA
 雌：淡黄緑色で側縁に黒斑をもつ。胴背毛のうちc1,
 d1, e1は後ろの毛の起点をわずかに越える。周気管の末
 端部は肥大し、しばしばわずかに曲がる。生殖口蓋のす
 ぐ前の領域は横走する条線をもつ。出糸突起は高さが幅
 の約2倍。体長360~460 μ m。雄：出糸突起は微小で
 乳頭状、高さと同長。挿入器は後方でゆるやかに腹
 方に曲がり、末端部分は人の足状である(図-46)。体
 長300 μ m。ブドウ、イチゴに寄生する。生態は不詳。

(35) ミズキアケハダニ *Eotetranychus cornicola*
 EHARA
 雌：淡黄緑色で側縁部に黒斑がある。胴背毛は隣の毛
 の起点をはるかに越える。周気管の末端部はほとんど真
 っすぐで、末端はやや肥大。生殖口蓋のすぐ前の皮膚は
 横条をもつ。出糸突起は高さが幅の約2倍。体長390 μ m。
 雄：出糸突起は微小で乳頭状、高さと同長。挿入器
 はコウノアケハダニに類似する(図-47)。体長270 μ m。
 ミズキに寄生。生態不詳。

(36) ルイスアケハダニ *Eotetranychus lewisi*
 (McGREGOR)
 雌：淡黄緑色で体側に黒斑をもつ。胴背毛はすぐ後ろ
 の毛の起点を越える。後体部背面の正中域の皮膚条線は、
 一様に横走する。周気管の末端部はL字状。生殖口蓋
 の皮膚条線は横走し、そのすぐ前の領域の条線も横走す
 る。出糸突起は長さが幅の約2倍。体長470 μ m。雄：
 同色。出糸突起は微小で乳頭状。挿入器の後部はほぼ
 45°の角度で腹方に曲がり、しだいに細くなる下降部
 を形成する。下降部はゆるやかなS字状を描いて湾曲
 する。挿入器の軸部背面はやや凹状を呈する(図-48)。
 体長340 μ m。1997年9月に奈良県御所市のポインセチ
 アから発見された。その後、他所のポインセチアからも
 見つかっている。海外ではカンキツ、パパイヤ、モモ、
 イチジク、オリーブなどにも寄生することがわかっている
 広食性の種。ポインセチアでは、加害された葉が淡色
 化していき、やがて黄化する。ポインセチアは葉の赤と
 緑のコントラストの美しさが品質面で重要であり、葉の

黄化は著しく商品価値を低下させる。加害が進むと‘苞’（赤い葉）にも寄生し、落葉することもある（江原ら，1998）。通常は葉裏に寄生するが、個体数が増えると葉表にも寄生する。

(37) ハンノキアケハダニ *Eotetranychus tiliarium*
(HERMANN)

雌：淡黄色で側縁部に黒斑をもつ。胴背毛は隣の毛の起点をはるかに越える。周気管の末端部はU形～L形に曲がる。生殖口蓋のすぐ前の条線は横走し、出糸突起は高さが幅の約2倍。体長 $410\mu\text{m}$ 。雄：同色。出糸突起は高さが幅の少なくとも2.5倍。挿入器は極めて細長く、むち状かつほとんど直線状（図-49）。体長 $290\mu\text{m}$ 。ハンノキ、ヤマハンノキ、エゾサンザシに寄生する。ハンノキでは、主脈沿いに巣網を張り、その中で生活するため、巣網に沿って白色～黄色の長方形の被害痕を出す。毛が多いケヤマハンノキでは、巣網は不鮮明で、葉面全面に寄生し、全体に白～黄色の被害痕を出す。後者における個体数が前者より著しく多くなる。休眠雌で越冬し、体色は鮮黄色に変わる。札幌では、5月上旬に雌成虫が葉上に出現し、7月に個体数のピークを迎える。ハンノキでは11月上旬に雌成虫のみとなるが、ケヤマハンノキでは完全に落葉する10月下旬まですべての發育ステージが見られる。葉上に残った個体は落葉とともに消滅する。休眠は9月上旬に誘起され始め、9月末までにはすべて休眠雌となる。休眠消去は、真冬から春に向かってゆるやかに進行する（産卵までの期間が徐々に短縮する）ものと考えられる。5世代を通過する。

(38) クリアケハダニ *Eotetranychus pruni*
(OUDEMANS)

雌：淡黄色で側縁に黒斑がある。周気管の末端部は弱く曲がっているが、U形になることはない（これがクルマアケハダニとの区別点；図-53～57）。体長 $360\mu\text{m}$ 。雄：同色。挿入器は極めて細長く、かつむち状であるが、途中で強く起伏する点で、ハンノキアケハダニやシナノキアケハダニと区別できる（図-51）。体長 $290\mu\text{m}$ 。クりに寄生する。雌成虫で休眠し、体色は橙黄色に変わる。生態不詳。

(39) シナノキアケハダニ *Eotetranychus quercii*
REEVES

雌：淡黄緑色で体側縁に黒斑をもつ。周気管は末端で強く曲がっているかU形である。体長 $400\mu\text{m}$ 。雄：同色。挿入器はハンノキアケハダニより短く、弱い起伏がある（図-50）。体長 $270\mu\text{m}$ 。シナノキに寄生。アメリカでは雌成虫で休眠し、5月中旬に樹皮から葉に移動し、6月に個体数のピークがある。加害が激しいと一部の樹

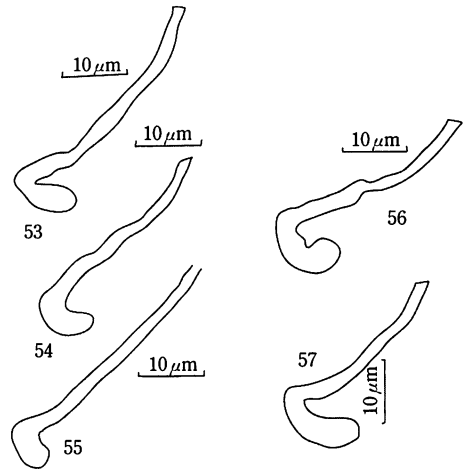


図-53～57 クリアケハダニの雌(53～55)とクルマアケハダニの雌(56, 57)の周気管(EHARA, 1970)

では完全に落葉するという。主脈沿いに食害し、加害部は白化後、褐変する(REEVES, 1963)。

(40) クルミアケハダニ *Eotetranychus uncatatus*
GARMAN

雌：淡黄緑色で体側縁部に黒斑をもつ。周気管の末端部はU字状（図-56～57）。体長 $360\mu\text{m}$ 。雄：同色。挿入器の途中が強く起伏する（図-52）。体長 $250\mu\text{m}$ 。クルマヤシラカバに寄生する。休眠雌の体色は鮮黄色。葉裏に寄生し、寄生部位は白化するが、のちに黄変。札幌では、5月上旬に産卵が始まり、植物葉の劣化が目立つ9月下旬または11月上旬に活動を終える。この間、7月に個体数のピークを示し、ともに4世代を通過する。休眠雌は8月下旬に現れ、9月下旬にはすべてが休眠雌となる。休眠雌は樹皮の薄皮や割れ目に移動して越冬する。休眠は徐々に消去されていく（産卵までの期間が徐々に短縮する）。

(41) スギナミハダニ *Eotetranychus suginamensis*
(YOKOYAMA)

雌：淡黄緑色で体側縁部に黒斑がある。胴背毛は比較的短く、c1, d1, e1, f1の毛は、それぞれのすぐ後ろの毛の起点にかろうじて届く程度である。周気管は末端部で鉤状に曲がり、その末縁は凹形。体長 $400\mu\text{m}$ 。雄：同色。出糸突起を欠く。挿入器の軸部は凹形の背縁と凸形の腹縁をもち、後方に向かってしだいに細くなる。挿入器は後端近くで腹方に直角近く曲がり、S字状の末端を形成する。体長 $330\mu\text{m}$ 。クワに寄生。夏型雌は葉裏の主支脈沿いに1～5個体の小集団を形成して生息する。吐糸で巣網をつくり、その下に生息。巣網上には白い排泄物と黒色の糞を出すほか、巣網と面部との接点にも糞

を出すため、巢網の境界が明瞭である。白色の卵は巢内に産下され、さらに1層の薄いベール状の網でおおわれる。摂食は巢網内だけで行われるので、被害は巢網の位置に白斑として現れ、やがて黄～褐変する。これらは葉脈沿いに数珠状に連なっていくため、独特の文様を呈する。東京では5月中～下旬に葉上に出現し、10月下旬まで活動して10世代を経過する。個体数のピークは、7月と9月の2回。橙黄色の休眠雌は10月上旬頃出現し、樹皮の割れ目で越冬する。なお、「スギナミ」は東京都「杉並」の意味である。

(42) エノキアケハダニ *Eotetranychus celtis* EHARA

雌：淡黄緑色で体側縁部に黒斑をもつ。胴背毛は隣の毛の起点を越える。周気管は末端部でしばしばL形に曲がる。体長400 μ m。雄：同色。出糸突起を欠く。挿入器は後部で急に細くなりながら下方へ90°近く曲がり、以後は少しずつ細くなって、末端近くで再度ほぼ直角に後方に曲がっている。体長290 μ m。本種は、エノキやムクノキの葉を葉裏方向に少し巻き込み、お椀状に変形させた葉裏に不規則な層状の網を張って生息。幼・若虫、静止期、成虫および茶色の糞は糸上に現れる。被害は最初、寄生部位近くの主脈に沿って白斑として現れ、摂食が進むにつれて周辺部に広がる。やがて葉面はすべて白く脱色し、ついに褐変する。休眠雌は鮮赤色に変化し、樹皮の割れ目などで集団越冬する。関東地方では雌成虫が5月上旬頃から葉上に出現し始め、7月に個体数のピークに達する。8月中旬から休眠雌が出始め、9月中旬以降に発生する成虫のほとんどは樹幹に移動して越冬に入る。個体数が多い葉では7月に休眠雌が出現することがある。

(43) ムクノキアケハダニ *Eotetranychus nomurai* EHARA

雌：淡黄緑色で体側縁部に黒斑をもつ。胴背毛は隣の毛の起点をはるかに越える。周気管の末端部はU字状に曲がる。体長360 μ m。雄：同色。出糸突起を欠く。挿入器はスギナミハダニに似るが、軸部背縁が真っすぐである点で異なる。体長330 μ m。ムクノキの葉裏に寄生。生態の詳細不明。

(44) スミスアケハダニ *Eotetranychus smithi* PRITCHARD and BAKER

雌：赤色。胴背毛は隣の毛の起点を越える。周気管は末端近くで鉤形に曲がる。生殖口蓋のすぐ前の条線は縦走する。出糸突起は高さが幅の約1.5倍。体長420 μ m。雄：同色。出糸突起は高さが幅の約2.5倍。挿入器は後部にいくにつれてしだいに背方に曲がり、真ん中より後ろで再びゆるやかに下降しS字状の末端部を形づくる。

体長330 μ m。ブドウ、ナシ、イチゴなどに寄生。11月頃から橙～赤色の休眠卵を葉に産み始める。夏卵は白～黄色。主に葉裏に寄生し、イチゴではかすり状の白色ないし淡褐色の小斑点を生ずる。ブドウでは寄生部が褐色を帯び、密度が高くなると落葉することがある(江原・芦原, 1993)。

(45) ヒメカエデアケハダニ *Eotetranychus spectabilis* EHARA

雌：暗赤色。胴背毛は隣の毛の起点をはるかに越える。後体部正中域は、f1毛の後ろで逆V字状に走る条線をもつ。周気管の末端部はUまたはL字状。生殖口蓋のすぐ前の条線は縦走。出糸突起の高さは幅の2倍に満たない。体長390 μ m。雄：出糸突起の高さが幅の2倍以上。挿入器は後部でほぼ直角に下方に曲がり、以後はおおむね真っすぐである。体長330 μ m。カエデに寄生する。生態の詳細は不明。

(46) ニセカツラアケハダニ *Eotetranychus tsugaruensis* EHARA

雌：淡黄緑色と思われる。胴背毛は隣の毛の起点をはるかに越える。周気管の末端部は多かれ少なかれ曲がる。生殖口蓋のすぐ前の領域は縦条をもつ。出糸突起は高さが幅の約2倍。体長410 μ m。雄：出糸突起は高さと同長。挿入器は軸部の腹縁が著しく凸形、背縁が凹形。挿入器の末端部は‘膝から下の人の足’のような形状を呈する。体長330 μ m。カツラに寄生する。生態不詳。

(47) イヌシデアケハダニ *Eotetranychus rubricans* EHARA

雌：暗赤色。体長420 μ m。胴背毛は隣の毛の起点をはるかに越える。周気管の末端部はU字状。生殖口蓋の条線は横走。生殖口蓋のすぐ前の条線は縦走。出糸突起は高さが幅の約2倍。爪間体の正中背部に顕著な爪状突起がある。雄：淡黄緑色。出糸突起を欠く。挿入器はほぼ直角に下方に曲がり、細くなる。挿入器の先端部は背縁のおよそ1/3の長さがあり、S字状を呈する。挿入器の背縁も腹縁もほぼ直線状。体長330 μ m。イヌシデアの葉裏に寄生する。生態不詳。

(48) コナラアケハダニ *Eotetranychus quercifoliae* EHARA and GOTOH

雌：淡黄緑色。胴背毛はすぐ後ろの毛の起点をはるかに越える。周気管の末端部はL字状。生殖口蓋の条線は横走。生殖口蓋のすぐ前の条線は縦走。出糸突起は高さが幅の約2倍。爪間体の正中背部には微小な爪状突起がある。体長410 μ m。雄：同色。出糸突起を欠く。挿入器はほぼ直角に下方に曲がり、細くなる。挿入器の先端部は背縁の1/3弱の長さがありS字状。挿入器の背

縁は凸形、腹縁はわずかに凹形。出糸突起は痕跡的、またはない。体長 280 μm 。コナラの葉裏に寄生。関東地方では4月中～下旬に休眠雌が産卵を始め、9月に個体数のピークを示し、10月下旬に活動を終える。休眠雌は濃黄色。

(49) オオカエデアケハダニ *Eotetranychus dissectus*

EHARA

雌：暗赤色。胴背毛は隣の毛の起点をはるかに越える。周気管の末端部はL～J形に曲がる。生殖口蓋のすぐ前の領域は縦条をもつ。出糸突起の高さは幅と同長。体長 520 μm 。雄：同色。出糸突起は円錐状で、高さは幅よりもはるかに大きい。挿入器は末端に向かいしだいに細くなるが、終始ほぼ直走。体長 430 μm 。イタヤカエデアケデアに寄生。イタヤカエデアの葉にできた凹凸に層状網を張り、その中に生息する。札幌では5月上旬に産卵が始まり、5月と9月に個体数のピークを示し、10月中旬～11月上旬に活動を終える。この間、3～4世代を経過する。鮮赤色の休眠雌は8月下旬に出現し始め、9月中旬にはすべてが休眠雌になる。樹皮の割れ目に入り越冬する。性比は著しく雌に片寄り、約90%を占める。

(50) コウノアケハダニ *Eotetranychus asiaticus*

EHARA

雌：淡黄緑色で側縁部に3個または不規則な黒斑をも

つ。胴背毛は隣の毛の起点をはるかに越える。周気管は末端部で鉤形に曲がり、肥大した末端に終わる。生殖口蓋のすぐ前の条線は縦走。出糸突起は高さが幅の約2倍。体長 360 μm 。雄：同色。出糸突起は微小で円錐形。高さが幅と同じか少し長い。挿入器は後部で腹方へ曲がり、ほぼ真つすぐに下降し、末端で反り返っていない。体長 220 μm 。カンキツ、チャ、カキ、ツツジ、モッコクなどの葉裏に寄生する。休眠性はなく、すべてのステージで越冬する。春季に発生 of ピークがあり、夏季はほとんど発生しない(江原・芦原, 1993)。加害されると新葉が萎縮・褐変し、激しいときは落葉する。モッコクでは葉を内側に激しく変形させる。

(51) ミヤケアケハダニ *Eotetranychus kankitus*

EHARA

雌：淡黄緑色で側縁部に各2黒斑をもつ。出糸突起は高さが幅の2.5倍。体長 390 μm 。雄：出糸突起は高さが幅の約2倍。挿入器は後部で腹方へ曲がり、細くなりながら真つすぐに下降し、末端で軽く反り返る。体長 300 μm 。カンキツの葉裏に寄生し、面部を中心に激しく加害する。被害部は黄色となり、やがて褐変・湾曲し、寄生密度が高いと落葉する。春と秋に個体数のピークをもち、すべてのステージで越冬する(江原・芦原, 1993)。

書評

梅谷献二 著 「虫を食べる文化誌」

319 ページ 2,520 円(税込み)

創森社(2004年9月)発行

本書は、第1章「一寸の虫にも五分の魂」、第2章「虫食う人も好きずき」および第3章「釣りの商虫」から成っている(以下かぎカッコ内は本書より引用)。

第1章は序章ともいえる。昆虫は膨大な数の種を含む最大の動物群であり、進化の過程で多様な環境に適応してきたことが例示されている。また、トンボ釣りや虫の音鑑賞など、ヒトと虫のかかわりあい著者自身の少年時代の思い出も含めて描かれている。虫は「五分の魂」で生きており、ヒトは虫たちを無視できないのである。

第2章は本書の約半分を占めている。ここでは昆虫の食料としての直接的利用、すなわち昆虫食が薬用昆虫も含めて扱われている。中国、タイなどの現地で著者自身が食べた料理が、写真とともに調理法、味、また値段までもが紹介され、アリヤクモのようなこんな虫がと思うような食材が多々あり、美味なもの少なからずあるようで、多様な食文化に驚かされる。日本でも食虫は江戸時代までは普通であったが、今では一般的に悪食とみなされる。しかし、昆虫の産業的利用プロジェクトの旗振り役を担ってきた著者は、「地上最大の未利用資源」である栄養豊富な昆虫に注目し、「昆虫食に対するイメージの自己改革」に取り組むべきだと訴えている。

第3章では、食と関連した昆虫の間接的利用として釣

り餌の昆虫が取り上げられている。釣り餌としては欧米では擬似餌が一般的だが、日本は生き餌が多用され、生きた虫が「商虫」として販売されている。釣り餌昆虫の分野は、昆虫学ないし趣味の対象としての昆虫の分野とは異なった世界にある。後者の世界の人間として「これら2つの世界の境界に無理に子穴を開けてのぞき見た」著者の知見が釣り餌の「多彩なメニューの正体」としてまとめられていて、今まで情報が少なかったこの分野の貴重な資料ともなっている。

本書には176種(巻末の虫名索引による)の虫が出てくる。この数は全昆虫種数のほんの一部にしか過ぎないだろうが、それでも本書からは「人と虫が織りなす濃密な関係」があることをあらためて認識させられる。

日本人は伝統的に虫に対して愛情ともいえる感情を抱いてきたが、自然生態系劣化とともに虫に触れる機会が減り、「嫌虫症」という用語までできている現状を情けなく思っているのは著者ばかりではあるまい。いままでもこの著者が上梓した昆虫に関する一般向けの著書同様、本書も文章は平易でユーモアがあり、単に「虫の民俗学」にとどまらず、虫への興味を引き出し、ひいては生命の尊さを知る糸口となるにちがいない。引用文献も付けられているので、さらに知識を広めることもできる。また、著者は昆虫オブジェないしグッズの収集者としても著名である。その膨大な数の収集品から選んだものの写真をカラー口絵ほか随所に載せているのもユニークである。本書は昆虫愛好家にだけでなく、青少年も含む多くの人に薦めたい著作である。(坂井道彦)